

## 一般演題抄録

### I-3 当院の発熱外来における新型コロナウイルス感染症診療 第2報：特にインフルエンザとの対比

○町田光司（医療法人白鷗会 まちだ内科クリニック）

昨年の本学会で当院の発熱外来のコロナ診療について報告したが、今回はコロナの第5類移行後のインフルエンザとの対比についても検討した。

コロナは、令和3年の1年間で17例の発生に留まったが、オミクロン株への変異により令和4年1月から多数の患者が発症し、クラスターも数多く見られた。

令和4年1月から令和6年4月までの合計で受診者は16270人中、コロナ陽性は6076例（37.3%）、インフルエンザ陽性は1937例（11.9%）、計8013例（49.3%）が陽性であった。

インフルエンザとの対比で見ると、インフルエンザは令和1年は279例、令和2年は120例だったが、コロナの発生が始まった令和3年はわずかに2例と激減した。そして、令和4年12月から増え始めるに伴ってコロナは激減して令和5年の3月には31例に減少した。しかし、同年5月末にインフルエンザが終息するに従い、コロナは急激に増えて8月には491例となった。また、インフルエンザが9月から発生し始めると、9月には247例だったコロナは10月は47例、11月には46例、12月には54例と減った。しかし、翌年1月からインフルエンザが減ると共にコロナは1月156例、2月178例と増え、2月からB型インフルエンザが増えると共にコロナが減り始めて、4月にインフルエンザが終息すると共にコロナは185例と上昇が認められた。

こうした現象の背景には、コロナとインフルエンザのウイルス干渉の関与も考えられ、今後のコロナ対策にも考慮されるべきである。

コロナの治療については、抗ウイルス剤の薬剤負担が今年4月から大幅に増えたため、患者側の症状とコスト負担との兼ね合いによるが、糖尿病のコントロール不良例や免疫不全等の基礎疾患を有する例、特に高齢者はコロナ感染による急変や介護度の増悪等のリスクが有るため、抗ウイルス剤の使用が望ましい。

老人施設でもクラスター防止のため、コロナ患者には抗ウイルス剤を早期に使用すべきと考えられる。

尚、コロナの重症後遺症（1例）や死亡事例（11例）、検死例（9例）を供覧した。